

華道家

假屋崎省吾

KARIYAZAKI Shogo

ダイナミックで優美ないけばなの世界を創造する假屋崎省吾さん。内気で無口な園芸少年から、日本を代表する華道家へと大輪の花を咲かせました。流派の伝統を超越するような「美」の感性はどのようにして育まれたのでしょうか。裕福ではなくても日々の暮らしに彩りを与えてくれた亡き父母への感謝から、枯れるからこそ美しい「いけばな」の魅力まで、やさしい言葉で語っていただきました。



花を咲かせるポジティブ思考

父と母が広げてくれた 自分だけの美しい世界

—— 假屋崎さんは少年時代から花が好きで、クラスの男の子が熱中している野球やサッカーよりも、庭で植物の球根を植えたリ株分けしたりするのが楽しみだったと伺いました。やりたいことを自由にやらせてもらったことが今につながっていると著書でも書いておられますが、ご両親や学校の先生方からどのような教えを受けてこられたのでしょうか。

假屋崎 多感な時期に、ほかの子とは違うものに関心を持っていただけですが、自分のはのんびりしていて、あまり人のことは気に

ならなかったんです。自分の世界というものがありません。両親も、これをやらなくちゃ駄目とか、あれはやっちゃいけないとか言わないでいてくれた。好きなことを、もっと伸ばして広げてくれる、そんな親でした。学校は、今のようになんか少子化になる前の前の時代でしたから、一クラスの人数が多いし、クラスの数も多い。それなのに、担任の先生は一人ひとりのことをよく見ていました。幼稚園、小学校、中学校と、居心地が悪いと思っただけ記憶はないんです。例えば、体育が不得意でしたけれ

ども、先生は人間味があって、できなくてもちゃんと認めてくれるところがありました。それに、世の中でいじめと言われるような出来事も、自分の関わる学校にはなかったように思います。——ご両親の趣味も園芸でしたね？ 假屋崎 父は鹿児島県生まれで、大学の建築学科を卒業した後、東京都の中央区役所に勤めた公務員でした。母は長野県生まれで、銀座でOLをしていました。まさに「銀座の恋の物語」(注)ということで結婚したんですね。新居は抽選で当たった都営住宅練馬区石神井にあった新築の棟割り長屋で、六畳間と四畳半とトイレと台所に、南向きの広い庭が付いていました。父も母も田舎出身ですから、その庭で四季折々の花を育てていたんです。ツツジにアジサイ、バラにポタシ……。自分も物心がつく頃から園芸に興味を持って、種をまいたり、庭の設計図を描いたり、アサガオの品種改良のまねごとをしたり、花を育てる園芸少年になりました。

(注) 一九六一年に発売された石原裕次郎と牧村旬子のデュエット曲。



かりやざき・しょうご●華道家。銀座にて假屋崎省吾 花教室を主宰。1958年生まれ。東京都出身。早稲田大学卒。美輪明宏氏より「美をつむぎだす手を持つ人」と評され、日本初の「華道家」として世界各地で「いけばな」を広める活動にも精励する。クリントン大統領来日時の会場装花、明仁天皇御在位10年記念式典・舞台装飾、明仁天皇御退位・徳仁天皇御即位スタジオ装花、花博覧会のプロデュースなどを手掛ける。女子美術大学・客員教授、フランス観光親善大使、オランダチューリップ大使などを務め、「シンビジウムのコサージュ展示（7,585個）」の世界ギネス記録にも認定される。着物、ガラス器、ジュエリー、棺、骨壺などのデザイン・プロデュースをおこない、デザイナーとしての才能を発揮。また、ライフワークでもある花と建物のコラボレートとなる個展“歴史的建築物に挑む”を開催、世界各国でも展示会を開催し国内外で目覚ましい活動を展開している。その他、花を使った情操教育の「花育」や「少子化問題」「伝統工芸品の振興促進」などの地域活性化を促す社会ボランティア活動も積極的に取り組み、2022年、華道歴40年を迎え、ますます活躍の場を広げている。

クラシックが好きな母の影響で、自宅でバイオリンも習いました。小学校の入学前から、先生に出稽古を付けてもらっていたんです。中学からはピアノの教室に通いました。父は建物が大好きで、年子の妹と家族四人で、いつも旅行をして、みんなでお城やお寺を見に行きました。父の書棚に並んでいる建築の本や平面図を見たり、一人で出掛けて元華族のお屋敷とかを眺めたりするのも楽しみでした。なかでも日銀の歴史的な建築物、これ

は本当に極め付きで、大好きでしたね。本当に趣味がいっぱいある子で、どれも同年代の子の趣味とはかけ離れたものばかり。もともとコミュニケーションを取るのが苦手な上に、自分の好きなことを話したって誰も乗ってこないわけです。——それでも、周りからいじめられたり浮いてしまったりすることはなかったのでしょうか。假屋崎 自分は真面目な方で、誰にでもちゃんと挨拶をしてい

ました。相手の懐に深く入らず、そこそこのお付き合いができていたんだと思います。周りから見れば女の子みたいいな子だったんだらうけど、「人と違っていいな」と小さい頃から自覚していたので、対処法がわかっていたのかもしれない。何しろ、両親が向き不向きをちゃんとわかってくれていて、どこを伸ばせばいいかも考えてくれた。今となつては感謝してもしきれないです。

棟割り長屋に家族四人、何なく自由なく暮らしていました。でも、蓄えは全くありませんでした。普通の家は、いろんな目的を持って貯金をしていらしたと思うんですけど、うちは真逆

花をいけるときは直感で決断する

——大学生活はご自身が求めていたものとは違って、挫折感もあったと著書に書かれています。假屋崎 大学は希望のところに入れなくて、二浪して別の大学に進みました。でも、自分に合わないんじゃないかなと思っ

で、生活を楽しむためにお金を使っちゃおうという家庭だったんです。

そういうことも、自分が大人になっていく成長過程でかえってよかったなど。日々、美しい花や音楽に囲まれて暮らし、なおかつ、こんなのが見たい、あそこに行きたいと思っていると、自然な流れで「いいよ」となり、家族みんなで楽しむ。もっとお金があつたら、ちょっと違うことになつていたかもしれませんし、あまりになさすぎてもこういう日々は経験できなかったはずなので、ちょうどいい塩梅の暮らしをさせてもらったことは、とてもありがたかったなと思っています。

て、今度は早稲田大学に入り直しましたが、やっぱり同じこと……。何とか卒業して、アパレルメーカーに就職。当時は一九八〇年代のデザイナーズブランドブームで、面白そうに見えたからです。

一方で、早稲田大学の学生時代から通い始めた東京・青山のいけばな教室（草月流）は続けていました。就職して三カ月たったとき、朝から晩まで働きながらいけばなの修業もする、こんな生活を一生続けられるかなと思っただけです。教室の元から英国人芸術家のワークシヨップに参加するように指名も受けていました。仕事かいけばなか。アパレルの社長さんに相談して会社を辞めさせてもらい、それからフリーターになったんです。ファストフード店やスーパーマーケットでアルバイトをしながらいけばなの教室にコツコツと通い続けました。

休業時代は苦勞がいっぱいあったでしょうと、よく聞かれるんです。その時々にはいろんなことがあります。振り返ってそれが苦勞だったという感覚は全然ないんです。なぜかというと、いけばなが好きなことだったから。お金にはならなくても充実していたんです。アルバイトもつらくありませんでした。ファストフード店の

時給は三六〇円ぐらい。今の人はびつくりでしょうけど、とても昔のことですからね。そんな頃に、調理をやっていたら店長さんに「ちょっとレジをやっごらん」と言われたんです。それで接客するようになったら、すごく評判がよくて。「カリヤザキくん、カリヤザキくん」と親しみを持って呼ばれるようになりました。苦手だった人とのコミュニケーションも少しずつ苦ではなくなり始めたんです。主婦のパートの皆さんとも仲良くなって、その後、いけばなの個展を開くと何度も見に来てくれました。お客様との接し方は、アルバイトで自然と身に付いちちゃったんですね。

——好きなことを仕事にするのは、そう簡単なことでもないと思います。

假屋崎 好きなことを一生懸命続けていても、根本的に才能がない人もいらっしやいます。いけばなの世界も同じで、諦めるのは早めがいいと思うんです。なまじつか引きずって、取り返しのつかない年齢になってやっ

ぱり駄目だと思うよりは、さつさと見切りをつけて別を当たるほうがいい。

自分は、無駄だと思えることは好きじゃないんです。合理的な人間です。一日に何個もスケジュールを詰め込んだりしちゃう。仕事をするときは一気に集中するんです。だから、花をいけるときの速いです。心掛けているのは、決断。どの色の、ど

の形の、どの状態の花を選んで、どう構成するか。これ、これ、これという感じでどんどん決めていっちゃう。美しいかどうかを瞬時に判断できる「絶対美感」は、華道家には不可欠な能力です。手伝ってくれるスタッフがのんびりしていると本当にイライラしてしまいます。

家を買うときだって決断が早いです。最初の東京・表参道の



目黒雅叙園「百段階段」において開催された特別企画展「華道家 假屋崎省吾の世界」(2010年)での作品 (提供：(有)カリヤザキショウゴ)

家は、中国の上海から成田空港に到着したときに、不動産屋さんから「すごくいい物件があります」と連絡が来て、「じゃ、うちへ帰る前にそこに寄りますよ」と、トランクを持ったまま見に行つて「はい、買います」となったんです。それからほんの数年で、皆さんが假屋崎御殿と呼んでくださる家を新築することになります。そのときも美輪明宏さんのお宅に招かれ、タクシーで帰ってきたら、男の人が三人、隣の家を見上げて話をしていました。「売りに出るんですか」と聞いたら「そうです」と。

昔から「隣の土地は借金してで

新しい「美」を生み出し 人の心に感動を残したい

——生活を楽しむための出費は

惜しまない家庭で育った、というお話がありました。いま假屋崎さんご自身はお金をどういうふうに使っていますか。

假屋崎 自分の夢を実現するためのアイテムの一つでしょう。大事なものは使い方です。自

も買え」と言います。なので「この家買います」と即決したんです。

——直感的な判断で、結果的に失敗したことはありませんか。

假屋崎 あまりないです。不思議ですけども、直感で選んだところにどンドンお客様が来て満杯になる、というようなことばかり起るんです。また、海外に行くと、何十年ぶりの人に会ったりするなど、思いも寄らないことに出くわしたり、夢が実現したり……。何かがご縁をくださるのか、これは何だろうなということ、たくさんあるんです。

分はさっぱりしていて、きれいな使い方をしているのかもしれない。

——假屋崎さんの生き方や考え方には、すごくポジティブなところを感じます。

假屋崎 それはあるのかも。出会った人から「元気になった」と

とか「エネルギーをもらった」と、よく言われるんです。自分は本当に控えめで、前へ出たくないという気持ちがあるのに、何だかわからないですけれども、そう言われちゃいますね。

花というのは、置かれている空間が元気がいっぱいだと、咲くことだけにエネルギーを使えるから長持ちするそうです。これも不思議なんですけれど、我が家の花はとても長持ちするんです。切り花の活力剤を入れてはいますが、バラは一カ月ぐらい咲いています。

でも、展覧会に出した花がすぐ駄目になっちゃうこともあるんです。その場に集まる人たちがどこか病んでいた、負のパワーを持っていたりすると、花は癒やすことにエネルギーを使い切つて枯れていくんです。きれいな素直に感動してくれる人がほとんどですけど、残念ながら、なかには「こんなすごいところで展覧会を開催できてカリヤザキはうらやましい」とか、妬みやそねみの負のオーラが燃えたぎっている人もいます。

わけです。

——逆に言えば、花はそういう悪いものを吸収してくれているのかもしれないですね。花を通じて假屋崎さんが伝えたいことは何でしょうか。

假屋崎 花は、それ自体、自然が生み出した完成された「美」です。その完成された美しさを最大限に引き出して、自分の理想とする「新しい美」を生み出す。そういうことを自分はやっていきます。それが生きがいになっていくし、自分のつけた花をご覧になった人の気持ちが良い方向に変わっていくことがあれば、とてもうれしいです。花はやがて枯れていきます。美しいときは一瞬で、はかないものだからこそ、人の感情に訴えかけたり何か新しいものを生み出したりするんです。そこがすてきなと思いますね。自分は命ある限り、その一瞬の花の美しさを人の心に残していきたいという思いがあります。

——本日は、ありがとうございます。

(聞き手/情報サービス局長・上口洋司)